

国際磁気会議に出席して

京大教養 川崎辰夫^{*)}

ミュンヘンは今日も雨だった。ネオンのともりはじめた街並を、ひととき雨足のしげくなる頃、車はホテルに入った。年老いたドアマンに荷物をあずけ、深々とした深紅のジュータンを踏んで、小意気な風をした男の待つフロントに立った。という書き出しでいこうと出掛けの眠れぬ飛行機の中で考えてはいたのだが、到着したのは残暑のきびしい午後のひとときだった。これがそもそも話が脱線する緒口で以下の如くしどろもどろになってしまう。出席した会議はミュンヘンで9月3日～7日にわたって開催された。真実な報告はいずれどなたかがされと思うので、いささか放言的な印象を記したい。

西ドイツ205，フランス147，日本87，オランダ75，イギリス71，アメリカ66，スイス30，ベルギー18，スウェーデン15，ブラジル13，オーストリア，デンマーク，イタリー，ポーランド12，USSR，CSSR，ユーゴスラビア11，オーストリア10。これは会議に先立って登録された国別出席者（報告に名をつられた人々という方が正しい）の数である。主催国である西ドイツ，陸続きで且つこの分野で活発なフランスからの出席者が多いのは当然としても、日本が第3位の榮譽に輝くのはどうであろうか。磁性分野における貢献度，研究レベルの高さからいって不思議ではないのかもしれないし，むしろ誇るべきことなのかもしれない。文部省等の旅費にあずかりそこなった私を含め自費で我国より参加した者はかなりの数に達している。国際会議用の旅費の枠はかなり厳しく，もし参加が研究活動に有益ならば，今少し枠の拡大が望まれるところである。会議開催中の或る朝，我国物理学会の大御所の某先生にこの事を訴えた所，先生曰く「それにしては随分来てますね。」これを我国研究者の涙ぐましい努力への讃辞ととるか，痛烈な皮肉ととるかは読者の判断におまかせしたい。

発表論文数は全体で千にやや足らない程度でその内1/5はスピングラス関連のものであったという。しかし発表された論文の採択方法についてはいささか疑問点なしとしない。それは内容からではなく構成の面からみての話だが，先ず次の表をごらん願おう。

*) KAWASAKI Tatsuo

関与論文数	6	5	4	3	2
人 数	1	9	13	74	311

これは或特定の個人が何回発表論文に顔を出しているかを示すものである。6回という強者にはじまり3回までですでに100論文に達している。伝え聞く所によるとレフリーより2つの仕事を1つにまとめて発表せよといわれた著者もあるとか。会議の巨大化の一因にこのような発表の水増しがなければ幸である。或は3年毎では遅すぎるのか。又ポスターセッションで或著者が同時に3つのセクションを受持ち飛びまわっていた例もある。これらも選択がずさんではなかったかと思わせる一例である。これらの事はあくまで構成の面からの話であって内容に立入った話でないことをくりかえしおことわりしておきたい。

通信手段発表方法の発達した今日、第一線の研究所の仕事である限り、会議に出席しなければ時を失するという事は先ずなかろう。又国際会議出席の回数を誇る時代は過去のものとなっていると思うのだが、我国では或種の調査書申請書等にこのことを問う欄が未だ残されている。さて国際会議に出席するメチットは何処にあるのだろうか。ここからは私見中の私見に属する話になる。どの会議の目的にもその第一に急速に進展しつつある分野における最新の情報交換及び討論をうたっている。しかし現実には講演公募が半年前、プロシーディング原稿が3ヶ月前に締切られる為、会議で発表される事柄は必ずしも最新の結果・情報ではないこともある。メリットはもっと人間的なものなのではなかろうか。久しぶりに会って旧交を暖め、併せて最新の情報交換や展望について語り合うこと、交流の仲間をふやす機会にすること等かなり泥くさい面にメリットがあるように思われる。その意味では国際会議におけるポスターセッションは、発表する当人にとってはしんどい仕事だが甚だ有効な交流手段だと思う。又アプローチや結果の解釈について見解の対立している問題に関するパネルディスカッションは一国の学者だけではまかない切れな場合がある。これもメリットの一つに数えられよう。

次回は1982年京都で開催される事が決っている。若い研究者の皆さんの積極的な参加を期待するが、地元である限り参加するだけでも何がしかの意義があると思う。

とつくに せきがく けいがい

外国の碩学の警咳に接するも又たのしからずや